

日本留学という夢

一橋大学大学院法学研究（法学・国際関係）専攻
譚 天陽

私が初めて日本に来たのは大学三年生の頃でした。中国の上海に位置する華東政法大学にいた私は、大学の派遣留学プログラムを通し、日本へ留学することができました。その時の留学先が鹿児島大学でした。

鹿児島大学ではわずか半年くらいの生活しか送りませんでした。とても印象深かったので、今でも忘れてはいません。その頃、他の初日本留学の留学生のほとんどが日本語授業を中心に勉強していましたが、私は法学部の授業を積極的にとっていました。そのおかげで、日本の法律はどのようなものなのかということに初めて触れることができました。特にゼミナールという中国の法学部にはない授業形式に参加することで、法律の勉強におけるグループワークや人と議論することの大切さを初めて認識できました。そして、レポートの提出を重ねることによって、先生たちとの関係も深まりました。

帰国後、大学4年生になった私は卒業論文の執筆を始めました。日本と中国の法律の比較研究をする際に、日本の先行研究を手に入れないといけないと考え、日本語論文の文献調査を始めました。その際、当時鹿児島大学でお世話になった先生から、貴重な情報を提供して頂いたことで、先行文献を手に入れ、卒業論文を無事に完成することができました。母国では、一人の先生が担当する学生の数が多いため、このように丁寧な個人指導をしてくれたり、ゼミで議論してくれたり、帰国後もメールで親切に対応し、ものを調べてくれたりする先生はなかなかいませんでした。

卒業論文を経験することで、さらに研究しようという意欲が次第に生まれ、私は卒業後、日本へ再び留学することを決めました。研究生の半年間と修士課程の二年間を終えて、修士論文が完成しました。この二年半は私にとって、日本文化をさらに理解し、研究を深めることができた二年半でした。学校でティーチングアシスタントなどを担当し、学会へ参加し、そして数々の学者の先生と交流することで、日本の文化だけでなく、自分が目指すべき方向を見つけることができました。さらに、奨学金を獲得することで、財団の関係者及び先生、他大学の優秀な研究者と交流し、国際交流の大切さを認識することができました。感動と感謝の気持ちでいっぱいです。

留学生の私にとって、日本人と同様に学会へ参加し、懇親会などにおいて先生たちと交流したり、ゼミで外国人でありながら後輩をサポートしたり、そして学校及び財団から経済的な支援を受けたりできたことはとても貴重でした。昨今、日本はたくさんの海外留学生を受け入れ、どの分野においても優秀な研究者が存在しています。このような背景のもとに、自分も日本だけでなく各国から来日した優秀な研究者たちと深く交流することで、国際的な水準に達しているような研究を目指していきたいと思って、博士後期課程に進学しました。

博士後期課程では、さらに視野を広げた研究を行うことができました。修士課程では、母国の中国と日本の比較研究だけに着眼したのに対し、博士論文では、世界の複数の国・地域での関連法制度を検討の材料にすることができました。さらに、海外の学会に参加して現地の学者と交流したり、学会のみならず、実務家の方とのつながりを深めたりすることができました。これらのことが、私の博士論文の完成だけでなく、人生の見方にも深く影響を与えてくれました。

修了後、私は日本の大学で研究を続ける予定です。日本に来たこの数年間を振り返ってみると、夢が次から次へと実現できたなと思えました。学部時代、海外で学位を取得することが私の夢で、修士課程の頃は、研究者になることが夢で、博士後期課程では、これらの夢を実現することができました。今の夢といえば、自分の研究が世界に影響を与えることだと思います。夢が叶うよう頑張っていきたいと思います。